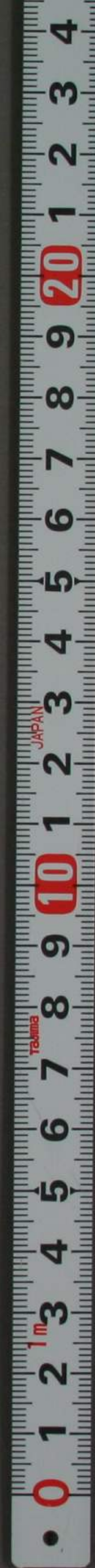


師竹庵聞書  
全

4曾1  
600  
105









門曾  
號 600  
卷 03



其場

東海海陸山川  
内外の白紙や

龍澤文庫



右沈やうん川飛込むあうの音  
うさあやう物いさうの音小  
あちやい集せぬとのハ石をかり  
其人 其人倫の白紙也  
いさあや太公局うまはらふら  
極人の民うまうとく姫姫  
極川極の山袖をさめさめ



時名

さき子をとりはさる白地也

まじり鳴く申の拍子や船子の色

いよのまふ返り舟の遠きかりの式

み月の返事小落路一葉ふくれ

時名

管領新書の白地也

七夕の格や岩手山に明か

今朝も流る森通りしてや風の萩

時名は美岩にまゝのまゝ

天相

日月風雨陰晴の白地也

徳禰の月を入る梨天れ川

月影のうつらぬとあふはるるかぬ

観相

豪末勿論水にほの光の  
海もふも戸の来りふと観也

やうて死ぬをききハ尼んを操の

おひらうふてやうてかきと務ふ

傍

軍手物終りてまゝ  
直代をとおひ合はれ事也

月流し遊行のそと砂の上



色之

色色いさふふして馬小  
糸と馬白の色之

白瓜やまの馬谷へ賞をく宛  
白鴉の尻を吹きまを回か那

時宜

其代に時宜日す屋のよら  
寺へふ白飯や澁白のふ及んす

業方

棉畑の隣小室をほり  
とらんやハ人小室をほり  
足袋賣の端をけり  
是袋賣の端をけり

又

赤地りも泥を捨多柳い

又

款を轉し多路

軒之の敷をく人きりふの月

引くもあそか  
赤地りもあそか  
赤地りもあそか

又

ほきくらの葉を拵や  
ひちかをのり小若う  
ひちかをのり小若う  
ひちかをのり小若う



海苔のよー 燈をさす 二階の

又 カキカトリセを多句

いふにや 舟の子 藪小を 帰  
屋鏡ふと 級志小志 柳小  
花月や 蕙美舟と 以く 細羅も 行  
千鳥の 中か 飛や 星一ツ

又 季をおへ 句法

稲妻れ 秋の 狩前 ぼる 哉

又 季を後へ 句法

若月や 様 の 影も 憎ま ぬ

又 に季をへ 句法

花鳥の 果や 柳小 糸い へ

又 秋の詞をこりて お揃ふ

凡中 志の 公さ くれ け  
こん ちや ちたき 杭小 飯 登

又 詩の 句をこりて

物をこりて



落しき新筈かぶくおや粽結ひ

むしくのう法

是しるくおのく葉枝自扱ふ

乙名や何をこまれく半返す

かんこく名取とさびいん飛る形

啼ふく好を白ちそかんお名

大粒の飛入もつり五月夏

又 詞をこりて骨を撫る事つり

ツクほや秋きりふき小

△タクをや秋の色くのふく魚と

又 詞をこりて骨を撫る事つり

いろくの梅の星や沖拍

くちのりやうりくすいんくのお拍  
扱俗伝の教るまの詞をこりる

昔話をもさくひるやわんせり

是ハかきのみよのそや

昔梅を採ふおんや小下

是ハ採梅の二字をこり











之の物小はさ訂のまふるるを  
おもしろく。堂を早小るり  
。若梅小咽をくおほはるる  
古歌軍争の事をもて能く  
いふものを入る事多し  
能く入る事多し部門の  
かゝる事

附合

意の葉の邊ハ相歌を讀み  
二人ハ語るとも是れ  
女會

判りその若小能く佛  
以ちくをこくそ唯人  
矢橋より遊回々怪とり  
八卦小合ハ生々  
けの山嵐小島を  
一人ハ落々橋  
田植の飯の流小  
まゝ北まとい



か 鍾と猫と喰人食ふ是の事

百物語を〜〜小たふ

孤て捨るほ望の故の事

行燈ふきつゝ女房の汁の味

風鼠とつれも御人の心

ほつろびを繼ふを衣におとる

角匠とあぢあぢとてる物所好

夷女所食とて甲し人

け寺の女新ハ音小流ハ晴子

流ハ白イ着人の長

森そのか〜りハ出を清〜後

鈴ハ渡を櫃小入〜〜

赤ハさあ〜の髪小指さす

駕籠の鳴〜をゆきハ滝山

燕の雛〜をやる之浦巴屋

かいと〜を喧嘩の物〜を紅〜

七三



る速く母波を仰ハコトウ（来る）

を〜を〜作る棉島の花

斤〜の目費ハ〜一〜時

吞〜ふるれ〜カ〜を詠免る

長心辨状小舟行一返屋

髪切〜浮世と縁の子小娘

婦〜娘〜も志れぬ五〜より

籠〜や〜ある〜どん結〜おに

金〜外〜中〜と〜ふ〜さ〜いた〜う〜これ〜言

あ〜う〜り〜め〜と〜せ〜お〜の〜ま〜ん〜振〜袖

お徳の娘

お徳の娘



李或晉師行卷之三  
李或晉師說之說  
羅文自記

東園居藏書







